

## ハンガリー及びルーマニアにみられる加速する手拍子の研究

矢向, 正人  
九州大学大学院芸術工学研究院コミュニケーションデザイン科学部門

<https://doi.org/10.15017/2230514>

---

出版情報：芸術工学研究. 30, pp.37-55, 2019-03-20. 九州大学大学院芸術工学研究院  
バージョン：  
権利関係：

## ハンガリー及びルーマニアにみられる加速する手拍子の研究

## A Study of Accelerating Clapping Observed in Hungary and Romania

矢向正人<sup>1</sup>

YAKO Masato

## Abstract

In the concerts and theatrical performances in Hungary and certain cities in Romania, unique acceleration phenomenon of hand clapping is often witnessed. This paper reports this accelerating clapping pattern that occurred only in these areas based on the author's investigation. In addition to Western music concerts, this accelerating clapping pattern is likely to occur in highly entertaining stage performance such as theater, musicals and dance, but it is hard to occur in concerts of experimental music, concerts in church, music contests, concerts for each lesson, concerts for children. Loud music with evenly spaced beats also interferes with this acceleration of clapping. This clapping pattern is sometimes created by a large audience, but there are cases where some clapping team guides it. The acceleration in the pattern may be unrelated to the moment of curtain call or bowing on the stage, but usually there is correspondence with such events. It is observed that this accelerating clapping pattern requires the audiences to notice not only their own applause but also the clapping of other audiences with the eyes of a third party rather than enthusiastically applauding.

## 1. はじめに

拍手と手拍子は、ともに称賛する行為として、どの文化圏においても打たれている<sup>1)</sup>。しかし、両者は殆どの場合、別個の打ち方として認識されている。集団の手打という観点から、両者は同様の行為であり、類似した音響現象である。しかし、同じ称賛の行為であっても、両者において手を打つことの意味は多少異なる。また、両者を打ち替えることにより意味が生じることもある。例えば、演奏会や演劇では、観客が拍手と手拍子とを打ち替えて、出演者に強い称賛のメッセージを伝えることがある。カーテンコールの要求を強めるために、拍手を手拍子に打ち替える聴衆の行動は、頻繁にみられる<sup>2)</sup>。

さて、手拍子を加速して、最後は拍手のように打ち終える打ち方がある<sup>3)</sup>。打楽器の奏法には連打を加速する打ち方があるが<sup>4)</sup>、称賛する行為においても、まずはゆっくりと手拍子を打ち始め、加速していく手の打ち方が、しばしば目撃される。例えば、陸上競技における跳躍などのフィールド競技では、助走を開始するときに、選手が観客に手拍子の加速を要求する。また、大道芸のジャグリングなど難度が高く危険を伴うパフォーマンスを観客が手を打って称賛するときに、手拍子に加速が生じることがある<sup>5)</sup>。他方、演奏会や演劇公演において、称賛の手拍子に加速が生じる現象を目撃することは少ない。日本以外でも、それは稀な現象であるといえる<sup>6)</sup>。しかし、その例外となる手拍子の加速現象に、ハンガリーとルーマニアにみられる独自の手拍子がある。本稿は、これらの地域における手拍子に生じ、他の地域では目撃することができない加速現象について、2018年の筆者の調

連絡先：矢向正人, yako@design.kyushu-u.ac.jp

<sup>1</sup> 九州大学大学院芸術工学研究院コミュニケーションデザイン科学部門  
Department of Communication Design Science, Faculty of Design, Kyushu University

査にもとづいて報告する。

## 2. ハンガリーにみられる手拍子の加速

### 2.1. 概要

ハンガリー及びルーマニアの一部の地域における演奏会や演劇公演では、他にない手拍子の加速現象を目撃することができる。これらの地域では、手拍子の加速は、繰り返し反復される。まず、手拍子が、強拍と弱拍に分かれる。強拍のみ残ると、加速を始める。そして、再び強拍と弱拍に分かれる。このパターンが繰り返されていく。ばらけた拍手にならずに加速しながら繰り返されていくこの手拍子を、本稿では HCP (Hungarian Clapping Pattern) と呼ぶ。演奏会や演劇公演で HCP を実際に目撃するためには、ハンガリーもしくはルーマニアに赴かねばならないが、まずは動画共有サイトでも視聴することができる。

動画共有サイトにある HCP の典型的な例を確認しておこう。2017 年 12 月 21 日にジュールの教会で催されたベラ・バルトク民俗歌謡小学校のクリスマス・コンサートにおける終演後の拍手を視聴してみる<sup>7)</sup>。手拍子が強拍と弱拍に分かれ、強拍のみ残ると加速が始まる、典型的な HCP を聴くことができる。この例の HCP は実際には以下の循環のように聞こえる。

拍手→手拍子 1→手拍子 2 (強拍+弱拍) →手拍子 3 (強拍のみ 1/2 速) →手拍子 4 (加速) →手拍子 1→……

すなわち、手拍子 2 で強拍と弱拍に分かれていた手拍子は、手拍子 3 では強拍のみになり、この結果、1/2 速の手拍子が作られ、このテンポが加速していく。耳にはこう聞こえるが、手を打っている聴衆の存在を考慮すると、手拍子 2 の段階では、強拍と弱拍を一人で打つのではなく、強拍のみを打つ聴衆と弱拍のみを打つ聴衆が混在していると検討される。手拍子 3 になると、大多数の聴衆が強拍のみを打ち会場の手拍子が一つになる<sup>8)</sup>。

HCP は、隣国との国境に近い町でも聴かれる。クロアチアに近いペーチュ、ルーマニアに近いベーケーシュチャバ、スロバキアに近いシャルゴータルヤーンやトカイでも明確な HCP が打たれていることが、動画共有サイトで確認できる。例えば、セルビアとの国境に近いセグドにあるセグド交響楽団の演奏会で、典型的な HCP が聴かれることが、セグド交響楽団の公式 YouTube サイトの

動画で確認できる<sup>9)</sup>。この演奏会で聴かれる HCP は明確であるが、国境を少し越えたセルビアのスポティツァで開かれた弦楽合奏の演奏会では、ゆっくりした手拍子が始まりかけるが明確にならず、加速もしていない。もう一つ例を示すと、オーストリアとの国境沿いの町であるケーセグの小学校で催されたブラスバンドの演奏会では HCP が聴かれるが、目と鼻の先のオーストリアの町では、手拍子の加速を確認していない<sup>10)</sup>。他方、HCP はルーマニアのトゥルグ・ムレシュ、オラデア、サツ・マーレ、ミエルクレア＝チュクなどで聴くことができる。例えば、ミエルクレア＝チュク市のチーク室内管弦楽団による演奏会で、HCP が打たれている<sup>11)</sup>。トゥルグ・ムレシュやミエルクレア＝チュクは、ハンガリーとの国境からずっと遠い。これらの地域でハンガリーの HCP が聴かれる事実は、地理的な近接ではなく、これらの地域にハンガリー人が住んでいることから説明できる。国勢調査によると、ミエルクレア＝チュクは人口の 80%、トゥルグ・ムレシュは 50%、オラデアは 25%、サツ・マーレは 40%、クジュール・ナボカは 20%がハンガリー人である。これらの人々は、自国から遠く離れていても、ハンガリー・コミュニティに囲まれて暮らしており、自分たちがマジール人であることを忘れることはない。そのアイデンティティーを保つために、自らの生活習慣を頑なに守ろうとするのであろう<sup>12)</sup>。HCP はハンガリー人がそのアイデンティティーを保つための行動である可能性がある。これらの背景を踏まえて調査を行った。

### 2.2. 調査

筆者は 2018 年 4 月に、ハンガリーのデブレツェンと、ルーマニアのトゥルグ・ムレシュ、オラデア、サツ・マーレ、クジュール・ナボカで、クラシック音楽の演奏会を対象に手拍子の加速についての調査を行った。6～7 月、9 月には、ブダペストで調査を行った。ブダペストの調査においては、加速現象が生じる条件を詳しく調べるため、調査対象を、演劇一般、ミュージカル、ポピュラー音楽演奏会、子供劇と人形芝居、サーカスなどに拡張したうえ、手拍子のテンポ変化、変換のタイミング、会釈やカーテンコールとの対応、手拍子団の有無と位置、終了の仕方、ホールにおける聴こえ、客層等について調べた。いずれも客席中央の最前列に近い席に着席した。予め演奏会場の担当責任者に調査目的を伝え、録音許可と写真撮影許可を求めた。録音許可が得られた演奏会のみ

演奏後の拍手を録音した。

手拍子に加速がみられる録音のデータを表1に示す<sup>13)</sup>。複数の手拍子団により競合が生じている場合は、会場を一つに占有するHCPのみ記入した<sup>14)</sup>。会場の片隅でのみ聴かれるHCPは記していない<sup>15)</sup>。以上の録音はすべて所持しているが、録画は行っておらず、以下の記述は調査記録にもとづく。写真1~19は筆者が撮影した。

### 3. クラシック音楽の演奏会

#### 3.1. オーケストラの演奏会にみる典型例

まず、クラシック音楽の演奏会の調査例を検討する。検討対象は、4月に調査したデブレツェンと、ルーマニア諸都市の演奏会である。

4月17日にデブレツェンのケルチェイセンター大ホールで、コダーイ・フィルハーモニー管弦楽団による演奏会が開かれた。聴衆は500~550人である(表1の1、写真1)。まず、1曲目のベートーヴェン《ピアノ協奏曲第1番》のHCPの推移を、表1の1~5行目のデータをもとに追ってみよう<sup>16)</sup>。

終演後の拍手が26秒続いたあとに手拍子になる。手拍子の平均テンポはBPM180であるが、4秒後に強拍と弱拍が生じ、その2秒後に強拍のみ残る。この結果、テンポは1/2速のBPM92になるが、徐々に加速し14秒後にBPM146の手拍子になる。このテンポがしばらく続くが、14秒後に強拍と弱拍が生じ、その2秒後に強拍のみ残る。この結果、テンポはBPM80になるが、徐々に加速し12秒後にBPM141の手拍子になる。

表1から、手拍子が上記のように推移しつつHCPが5巡することが読み取れる。しかし、HCPの成り立ちを検討するためには、打ち方の少しの違いや状況に注意しなければならない。本稿では、以下、表1から読み取れない、演奏ごとのHCPの特徴を中心に述べていく。

1曲目の《ピアノ協奏曲第1番》のHCPの特徴は、演奏家の会釈や再登場などと無関係にHCPが循環すること



写真1. デブレツェン・ケルチェイセンター

である。舞台と無関係なHCPの循環は、強く安定した称賛であると考えられるが、第1楽章のカデンツァが通常よりも長く即興されたことに加え、ピアノを弾きながらの指揮であったため、演奏への称賛に加えて、指揮者にねぎらいの意味でHCPが打たれたとも考えられる。なお、4月17日の演奏会では、1曲目に限らず、手拍子団の存在を確認できない。

2曲目のストラヴィンスキー《ペトルーシュカ》では、表1からは読み取れないが、手拍子は、1曲目よりもばらけており、速度も強さも不安定である。手拍子のこのテンポの揺らぎは、指揮者が楽器奏者やセクションを立たせるなどのセレモニーが、通常より長く続いたことに起因している。また、《ペトルーシュカ》では、会釈や再登場など舞台上の局面の移行が、HCPの循環の変わり目と一致する傾向がみられた。会釈や再登場が、HCPのどの段階に対応するかを特定することはできないが、舞台上で局面が移行するタイミングで、HCPが次の段階に移行するように見受けられた。

3曲目のストラヴィンスキー《花火》では、拍手に続く手拍子が、よく揃った手拍子になり、そのまま加速する。《ペトルーシュカ》と同様、舞台上のタイミングと、HCPの循環の変わり目には、対応があるようにみえる。どちらもHCPはカーテンコールの役割を果たしている。

手拍子に続く強拍と弱拍の打ち替えは、論点を提供している。手拍子が、強拍と弱拍に打ち替わるのであれば、どのタイミングでどう打つかの判断を、他の聴衆の手拍子を聴きながら行わねばならない。その判断を、ハンガリーの聴衆は瞬時に行っているようである。しかし、なぜ瞬時にそれを判断できるか、筆者にはわからないままである。但し、《花火》の手拍子は、この点に関して興味深いデータを提供している。表1から、《花火》では、手拍子を強拍と弱拍に打ち替えるときに、1~2秒の間隔があることが読み取れる。この間隔は、打ち替えのタイミングの判断に伴う遅れであると考えられる。打ち替えのとき、聴衆に少しの逡巡が生じていると考えるならば、この遅れはむしろ納得できるものである。いずれにせよ、1/2速への打ち替えは、聴衆が、次の瞬間にどう打つか、他の聴衆の手拍子を聴いたうえで判断する余地を残した打ち方である。なお、4月17日の演奏はどれも、はじめの1/2速のテンポが、2回目3回目の1/2速のテンポよりも速いが、この傾向は、表1の全データにおいて読み取れる。



写真2. オラデア・フィルハーモニーホール

4月19日にオラデアのフィルハーモニー・ホールで、同管弦楽団による演奏会が開かれた。聴衆は250~300人である(表1の2, 写真2)。1曲目のベートーヴェン《レオノーレ第3番》では、HCPは生じるが1巡のみで、儀礼的な打ち方であるといえる。2曲目のベートーヴェン《ピアノ協奏曲第5番》では、HCPが明確に現れる。ピアノは大きな音量で勿体振って弾かれていた。3曲目のベートーヴェン《交響曲第2番》では、HCPは4巡する。《交響曲第2番》では、カーテンコールや舞台上の局面との対応が、曖昧ではあるがみられる。まず、指揮者が舞台袖に下がっているときに、1/2速打直しが生じる。舞台袖のときに1/2速打直しに移行すると、再登場しやすい状況が作られる。さらに、指揮者が舞台袖から舞台に向っているときに、手拍子が持続する傾向がみられる。しかし、指揮者が楽器奏者とセクションを立たせると、手拍子は弱まる。手拍子団は確認できない。

4月26日にトゥルグ・ムレシュの文化宮殿大ホールで、トゥルグ・ムレシュ交響楽団による演奏会が開かれた。聴衆は250~300人である(表1の3, 写真3)。1曲目のテレマン《トランペット協奏曲》では、拍手と手拍子のあと、演奏者が舞台上に再登場する。その後、ゆっくりと手拍子が始まり、そのまま加速する。大きな称賛ではないが、HCPは2巡する。1回目は、表1には、1分12秒



写真3. トゥルグ・ムレシュ文化宮殿大ホール

から1分14秒までを強弱形成への遅れとして記しているが、1分14秒で手拍子が二つの手拍子団に分裂する。このためHCPは不明確になるが、1/2速となる1分17秒で一つに揃う。カーテンコールは2回あるが、舞台上の特定の局面とHCPとの対応は判然としない。ホール左側に手拍子団を確認したが、それに影響されずに手拍子を続ける聴衆も少数ながらいる。2曲目のガーシュウィン《ピアノ協奏曲第1番》では、2回目のHCPが生じる50秒前後から、HCPが二つの手拍子団に分裂する。演奏者が舞台袖に下がっても、手拍子団は分裂したままである。3回目のHCP形成時には、1分13秒から1分15秒まで遅れが生じているが、表1にAで示した1分09秒から1分15秒までのHCPも聴きとれる。どちらのHCPも、カーテンコールの役割を果たしている。3曲目のラフマニノフ《交響曲第1番》では、1回目のカーテンコールが生じる25秒前後に、表1からは読み取れないが、全体の手拍子とホール左側の手拍子団による手拍子とが分裂し、二つの手拍子の掛け合いのような状態になる。その後、一つの手拍子に収束していくが、この手拍子の分裂により、1回目のHCP形成時の24秒から27秒までは、ばらけた手拍子のように聞こえる。続くカーテンコールの後に1/2速打直しが生じる42秒前後から、指揮者が演奏者を順に起立させ拍手を始める。このセレモニーの間にも、HCPは循環している。表1から、3曲とも少し間をおいてから1/2速に打ち替えていることが読み取れる。

### 3.2. オーケストラの演奏会で1回もしくは生じない例

循環が4~5回のHCPを検討したが、HCPが1回のみ生じる演奏例もある。4月5日クルージュ・ナポカのアカデミック・カレッジ・ホールにおけるトランシルヴァニア・フィルハーモニー管弦楽団による演奏会では、ルーマニアの作曲家ネグレアの《レクイエム》が演奏された(表1の4)。聴衆は100人程で、演奏者の数が聴衆よりも多い。HCPは1回のみ生じるが、1/2速打直しの後の加速とその後の手拍子は、揃っていない。2~3人による手拍子団の他、舞台に近い前列にも手拍子団の存在を確認できる。2~3人の手拍子団は、演奏開始前から手拍子団相互の存在や位置を見定めているように見受けられる。この手拍子団が強い手拍子を継続したため、遠方の聴衆にもはたらきかけていきやすい雰囲気会場が作られる。しかし、カーテンコールや舞台上の局面と、HCPの変わり目との対応は明確ではない。



写真 4. サツ・マーレ・フィルハーモニーホール

4月12日にサツ・マーレのフィルハーモニー・ホールで、ディヌ・リパッティエ交響楽団による演奏会が開かれた。聴衆は80~100人である(表1の5, 写真4)。プログラム3曲のうち、最後に演奏されたハイドン《交響曲第97番》のみにHCPが1回生じた。手拍子団は明確でないが、HCPは自然に揃う。但し、強弱形成への遅れが生じている。

ハンガリーの例も挙げておこう。6月30日にブダペストの芸術宮殿バルトークホールで、ハンガリー国立フィルハーモニー管弦楽団によるオペレッタ・ガラコンサートが開かれた。聴衆は1600人程である(表1の6)。演奏された13曲のうち終曲とアンコール曲にHCPが1回ずつ生じる。終曲では、出演者4人が花束を受け取り会釈するときに1/2速打直しが生じる。アンコールには、4人が手をつないで会釈をする直前に1/2速打直しが生じる。その後、舞台袖に下がってからカーテンコールとして加速が生じかけるが、ばらけた拍手で終わる。

演奏後にHCPが生じたのであれば、それが1回であるとしても、会場の称賛は一つになったと考えてよい。しかし、1回のみで終わってしまうのは、それが儀礼的な行為であるからかもしれない。1回のみHCPは、称賛であるよりも、滞りなく演奏がなされたことに対する聴衆全体としての承認であるということもできる。

他方、HCPが生じずに終わる事例も多数ある。4月4日クルージュ・ナポカの国立オペラ劇場でのバレエ《ジゼル》公演は、聴衆300人超であるが空席が目立つ。筆者から通路を挟んだ左手前に3~4人程の手拍子団が確認された。手拍子団は強い手拍子で会場の手拍子の一つにしようとするが、他にも手拍子団が存在しており、一つにならない。手拍子に続き1/2速打直しが生じかけるが、まとまらず、加速せず、ばらけた拍手に戻る。3~4人の手拍子団が強い手拍子を持続したため、かえって他



写真 5. オラデア文化会館

の拍手が聞こえず、一つにならずに終わったのであるが、1~2人であれば一つにまとまると考えられる。

他方、ルーマニアで開かれた演奏会であるためにHCPが生じなかったと考えられる事例がある。4月20日にオラデアの文化会館で、ルーマニア民謡のコンサートが開かれた(写真5)。「オラデアで一つになろう」と題されたこのコンサートでは、7~8人の歌手がオーケストラの伴奏で順番に民謡を歌っていく。聴衆は手拍子を取り、あらかじめ配られたルーマニアの3色旗を振る。歌の旋律を歌手とともに口ずさむ聴衆もいる。歓声があがり、最後の曲では総立ちでこの3色旗を振っている。しかし、手拍子に加速は生じず、その徴候もみられない。3色旗はあくまでルーマニアの国旗であり、そこにハンガリー人のアイデンティティーが生じることはないであろう。ハンガリー人の結束は、たとえどんなに強くとも、そこがルーマニアである限り、ルーマニアの文化に影響されてしまう。国家という枠組みは、同民族で束ねられるコミュニティの結束を、こうして打ち破ってしまうのである。

### 3.3. オーケストラ以外の演奏会の例

オーケストラ以外の演奏会では、HCPはどのように生じるのであろうか。4月15日にデブレツェンのケルチェイセンター小ホールで、デブレツェン大学のチェロセクションの7人による演奏会が開かれた。聴衆は100人超である(表1の7)。プログラムの5曲のうち、ドビュッシー《子供の領分6番》、及び最後のゴードン&レヴェル《グッドナイト・マイラヴ》のみにHCPが生じた。しかし、どちらのHCPもあまり明確ではない。《子供の領分6番》では、拍手に続く手拍子がそのまま加速する。手拍

子団が存在するようであるが、会場のどこに存在するかは確認できない。1/2 速打直しでは、タイミングを計って打直しているように見受けられる。中年女性が頭上前に手を挙げ HCP の循環を身振りで示しながら打っているのが見られる。会場の手拍子を先導しているようだが、先導ではなく、他の手拍子を聴きながら合わせているようにも見える。

4月24日にトゥルグ・ムレシュの文化宮殿大ホールで、弦楽及びピアノ奏者5人による演奏会が開かれた。聴衆は80~90人である(表1の8)。プログラムの3曲のうち、最後のシューベルト《鱒》のみに HCP が1回生じた。手拍子団は2階の中央後方に2~3人確認された。表1からは読み取れないが、ホール全体の手拍子が始まる直前に、彼らは独自に HCP を打っている。しかし、あくまで局所的な HCP である。全体の手拍子そのまま加速し、1分ほど後に1/2速打直しになる。この1/2打直しはカーテンコールの役割を果たす。筆者の近くにも独自の手拍子を打つ聴き手があり、会場のその他の手拍子とに競合が生じていた。

4月25日にトゥルグ・ムレシュの文化宮殿の一室で、男声アカペラ12人による演奏会が開かれた。聴衆は120~140人である(表1の9, 写真6)。会場は本来のコンサートホールではなく、開演後は入口ロビーがそのまま演唱者の楽屋になる。プログラム14曲の殆どがハンガリーの作曲家による歌曲であり、3曲に明確な HCP が生じる。手拍子団は複数確認できる。左側の30~40代の男性が手拍子を先導しようとするが、他の拍手団とタイミングが合わず誘導できない。表の2曲目では、拍手が消えかかるときに、遠方でゆっくり打たれた手拍子に呼応して会場全体の HCP が生じる。表の3曲目では、演奏中に生じた手拍子そのまま HCP に移行する。強弱形成から1/2速打直しまでは、他の手拍子も存在するため、揃わない。演奏曲目が終了すると、司会者の演奏家へのコー



写真6. トゥルグ・ムレシュ文化宮殿の一室

ルに聴衆は HCP で加勢している。アンコール曲に HCP は3回生じる。表1には2巡目に強弱形成への遅れを記しているが、この遅れはばらけて拍手のように聞こえる。

HCP が生じる演奏会における聴衆の最小人数はどれくらいであろうか。9月14日にブダペストのパラティン・ホールで、ピアノとチェロのデュオによる演奏会が開かれた(表1の10)。聴衆は20人程であるが、休憩前のズガンバーティ《ナポリ風セレナータ》と最後のフランク《ソナタ》で、明確な HCP が生じる。《ナポリ風セレナータ》では、1/2速打直し後に加速しているが、加速は一定していない。聴衆のうち2人が HCP に誘導を行っていた。クラシック音楽の演奏会では、HCP に誘導する意図があるときには、聴衆が少ない方が誘導しやすいと考えられる。

### 3.4. クラシック音楽の屋外演奏会

7月2日にブダペストのヴァイダフニャド城の庭の一角で、ズグロー・フィルハーモニー管弦楽団による演奏会が開かれた。聴衆は300人程である(表1の11, 写真7)。複数の手拍子団が確認できるが、会場が屋外でしかも広いため、遠方の手拍子、特に後方の手拍子が聞こえてこない。舞台に近い客席でも、左側の客席と右側の客席の手拍子が揃わず、後方の手拍子は更に遠く聞こえる。プログラムの3曲のうち、休憩前のアンコール曲、及び最後のチャイコフスキー《交響曲第4番》に HCP が生じる。《交響曲第4番》では、指揮者が舞台外に降りたときに1回目及び2回目の HCP が生じる。表1からは読み取れないが、この2回の HCP は異なる手拍子団によるものである。その後、指揮者が舞台上がり会釈する前後に3回目の HCP が始まる。続いて指揮者が楽員をセクションごとに立たせて称賛する間にも手拍子は打たれているが、一つの手拍子にならず加速も生じない。右側の客席の手拍子が、左側のそれよりも揃う傾向があるが、どちらの手拍子もテンポと音量の揺らぎが大きい。なお、第1楽章の終了後に多数の聴衆によるフライングが生じている。拍手のみならず掛け声も大きい。

7月5日にブダペストのヴァイダフニャド城の庭の一角で、マヴ交響楽団によるガラ・コンサートが開かれた。聴衆は300人程である(表1の12, 写真7)。韓国人指揮者スーハン・チーは、遠慮がちな仕草を終始見せ、聴衆に会釈をするよりも、聴衆に目をやりながら繰り返すうなずいている時間が長い。複数の手拍子団が存在す



写真7. ヴァイダフニャド城の一角

る。屋外であるため遠方の手拍子がよく聞こえない状況である。1曲目のベリーニ《夢遊病の女》のアミーナの aria では、歌手がカーテンコールに応じて再登場し舞台中央で会釈すると手拍子も強くなる。指揮者は歌手に遠慮し、舞台左横で歌手の受ける拍手をしばらく聴いていたが、歌手に促されて舞台中央に戻り、歌手とともに会釈する。ここからゆっくりと HCP が始まる。表1には会場全体の HCP のみ記入したが、局所的な HCP と会場全体の HCP が1回ずつ聞こえる。アンコールとして休憩前に演奏された韓国の管弦楽曲では、指揮者がカーテンコールで再登場すると拍手が強まる。手拍子も聞こえるが揃っていない。会釈する直前に HCP が始まる。3曲目のドヴォルジャーク《交響曲第9番》では、指揮者が楽器奏者とセクションを立たせているとき、手拍子が生じているが揃っておらず、手拍子は会場全体に広がらない。その後、指揮者が全員を立たせ、ともに会釈し、舞台袖に下がろうとすると、拍手そのものが消えかかる。そのときに遠方から遅いテンポで生じた手拍子が会場全体に広がると、指揮者は再登場する。但し、筆者の近くの手拍子団はこの全体の手拍子に合わせようとしない。舞台中央で指揮者が再び会釈するタイミングで HCP が生じる。《交響曲第9番》には掛け声も多い。

### 3.5. 比較的アカデミックな環境の演奏会

7月6日にブダペストのエトヴェシュ・ロラード大学 (ELTE) ホールで、ブダペスト協奏交響楽団による演奏会が開かれた。聴衆は200人程である(表1の13, 写真8)。当初は屋外での演奏が企画されていたが会場変更でアカデミックな雰囲気での演奏会になった。1曲目のヴィヴァルディ《バスーン協奏曲》では、演奏者が会釈を終え舞台袖に下がるときに、拍手から手拍子になる。再登場して会釈するとき、1/2 打直しが始まるが、再び



写真8. エトヴェシュ・ロラード大学 (ELTE) ホール

舞台袖に下がるとすぐに終わる。2曲目のモーツァルト《ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲》は、演奏者がカーテンコールに応じて再登場するときに手拍子が揃いはじめ、会釈の直前に HCP が生じる。カーテンコールには再度応えるが、この間に HCP は2巡する。2回目及び3回目の HCP は、舞台と無関係に循環する。演奏会の前半には、聴衆の多数がアカデミックな雰囲気での演奏会であると感じていたようだが、後半には、聴衆の多数が、通常の演奏会と同様の状況であると感じとり、HCP が循環したものと考えられる。

9月18日にブダペストの芸術宮殿バルトークホールで、シャルル＝ユベール・ジェルヴェ (1671-1744) のオペラ《ヒュペルムネストラ》の上演が行われた(表1の14)。同オペラの18世紀以来の復活上演であり、上演は音楽研究の成果発表としての意味も持つ。聴衆は800~1000人である。休憩前には手拍子のみ生じる。終演後は、演奏者の会釈が終わるまで手拍子が続き、指揮者と歌手が舞台袖に下がるときに HCP が始まる。カーテンコールに応じて再び舞台に向うと、手拍子は加速する。指揮者と歌手5人が横一列に並ぶと HCP の循環が始まる。続いて横一列の状態でも2回会釈する。HCP による称賛に応じるため、1回の会釈であるところを、2回会釈したとも考えられる。会釈のときに HCP の循環が速やかに移行する傾向が認められる。指揮者が壇上に上るときにも循環が速やかに移行する。続いて指揮者が楽器奏者とセクションを起立させると HCP は持続せず、揃わない手拍子になり弱まる。その後、指揮者が舞台袖に下がり、上演に関わった研究者や演出家とともに再登場するが、このときの手拍子は不明確であり HCP の成否は判然としない。しかし、彼らに花束が贈られると、HCP が生じ循環する。続いて出演者が一旦舞台袖に下がってから再登場し、オーケストラの楽員数名にも花束が贈られるが、この間、HCP の



循環は持続している。続いて指揮者がオーケストラを起立させるときにも、循環はそのまま持続している。その後、楽員を舞台に残したまま、手拍子がフェードアウトして演奏会は終わる。この演奏会では、はじめは演奏者の再登場のタイミングで手拍子に加速が生じるが、HCPの循環が始まると、その変わり目が舞台上の局面と対応しなくなる。他方、花束を贈るセレモニーが、不明確な手拍子の中に明確なHCPを生じ循環を促す役割を果たしている。

### 3.6. クラシック音楽の演奏会にみるHCPの特徴

クラシックの演奏会にみるHCPの特徴について整理しておこう。

#### 1) HCPの生起

・クラシック音楽の演奏会では、HCPの成否には偶然が大きく介在する。

・会場が広すぎても、閑散としすぎても生じにくい(7月2日)。

・HCPは拍手団の誘導により生じる場合と、聴衆全体の間合いにより生じる場合がある。遠方の拍手が聞こえておらず、手拍子団がないにもかかわらず、手拍子のタイミングが一致しHCPが生じる例がある。

・誘導を計画的に行う手拍子団が存在する(4月5日他)。

・手拍子団が誘導してHCPが生じかけても、他の手拍子団とタイミングが合わない例や、多数による手拍子に消される例が多い。複数の異なるHCPは、そもそも聴き取れない例が多く、検討は難しい。

・遠方で静かに打たれた手拍子に呼応して会場全体のHCPが作られる例があるが(4月25日2曲目)、近傍の強力な手拍子団に影響されない聴衆もいる(4月26日1曲目、7月5日3曲目他)。

・分裂したままのHCPがある(4月26日2曲目、7月5日他)。また、全体のHCPと一部の手拍子団によるHCPとが掛け合いの様相を呈する事例がある(4月26日3曲目)。

#### 2) HCPのメッセージ性

・HCPは称賛の意味で打たれるが、1回のみHCPは儀礼的な役割が大きい(4月12日1曲目他)。

・HCPは演奏家へのねぎらいの意味でも打たれる(4月17日3曲目他)。

・演奏家の会釈や再登場などと無関係にHCPが循環していく例がある(4月17日1曲目他)。

・演奏者の会釈や再登場などのタイミングが、HCPの循環の変わり目と一致することがある(4月17日2,3曲目他)。

・指揮者が楽器奏者とセクションを立たせると、手拍子は弱まり、あるいは揺らぐ傾向がある(4月17日2曲目、9月18日他)。

・手拍子が続いているときに、ソリストが舞台に登場し会釈すると、手拍子は強められもしくは速められる傾向があるが、手拍子がばらけて弱められるときもある。

・舞台中央で会釈するタイミングでHCPが生じる例(6月30日、7月5日3曲目、7月6日2曲目)、会釈のタイミングでHCPの循環が速められる例がある(9月18日他)。

・花束贈呈の場面ではHCPは明確になる(6月30日、9月18日)。

#### 3) 1/2速打直し

・1/2速打直しするとき、間をおいてゆっくり打つ場合がある。それは聴衆が他の手拍子を聴いていることを意味する(4月17日3曲目、4月26日)。

・1/2速打直しは、音と音との間隔が広いので、聴衆にも演奏家にも気づきを促す(4月17日3曲目他)。ここに、状況変化への期待をメッセージとして込めることができる。1/2速打直しのこの効果は、カーテンコールで効果的であり、指揮者が舞台袖に下がっているときには、再登場しやすい状況が作られる(4月19日3曲目、4月24日)。他方、舞台袖に下がったときに手拍子に変化が生じないと、手拍子は消滅に向う傾向がある。

#### 4) その他

・HCPが生じる演奏会の聴衆の最小人数は、これまで確認した範囲では20人(9月14日)である。聴衆の数が少ない会場の方がHCPに誘導しやすい。

・クラシック音楽の演奏会の全データを通じて、はじめの1/2速のテンポが、2回目3回目の1/2速のテンポよりも速い傾向がある。

## 4. 舞台公演

### 4.1. 演劇

クラシック音楽の演奏会と同様にHCPがよく聴かれるのは、演劇やミュージカルなどの公演である。むしろ、エンターテインメント性を強く持つ舞台公演において、クラシック音楽の演奏会よりも明確なHCPのパターンの循環を聴くことができる。まず、安定したHCPは、演劇の拍手で聴くことができる。6月25日にブダペストのマ



写真 9. マダーチ劇場

ダーチ劇場で、コメディ劇『恋におちたシェイクスピア』の公演が行われた。観客は350人超である(表1の15, 写真9)。終演後、拍手から手拍子になりHCPが生じるが、加速するときに音楽が流れ始める。その後、音楽に合わせて手拍子は続くが、断続的である。音楽が終わると、再び拍手から手拍子になり、HCPの循環が始まる。HCPは6巡する。カーテンコールや舞台上の局面との対応はみられない。HCPの循環は舞台と無関係に生じているように聞こえるが、循環の変わり目にはメリハリがあり、よく揃った称賛のパターンが作られている。手拍子団は確認できないが、歓声は多い。

6月26日にブダペストのヤーテークシーン劇場で、ミュージカル・コメディ『グロリアス』の公演が行われた(表1の16, 写真10)。開演は19時で、観客は200人以下である。フローレンス・フォスター・ジェンキンスを主人公にしたコメディで、俳優も歌う劇である。終演後、主演俳優が登場すると手拍子になり、HCPの循環が始まる。HCPは9巡する。カーテンコールや舞台上の局面との対応はみられない。他方、表1からは読み取れないが、等間隔を維持しようとする手拍子も存在し、循環のはじめの段階では、劇場の1階と2階のHCPが揃わない。

9月17日にブダペストのスケーネー劇場で、コメディ劇『ドン・キホーテ』の公演が行われた。座席が階段状



写真 10. ヤーテークシーン劇場



写真 11. スケーネー劇場

の小劇場で、観客は120人程である(表1の17, 写真11)。終演後、出演俳優が横一線に並ぶと、HCPが生じ、そのまま循環が始まる。HCPは7巡する。出演者ごとの会釈はなく、カーテンコールや舞台上の局面とHCPの循環の変わり目との対応はみられない。

9月16日にブダペストのヴィーク劇場で、コメディ劇『城の遊戯』の公演が行われた。開演は15時で、観客は300~350人程である(表1の18, 写真12)。2~3人の俳優が中心に演じるコメディであるが、アクションが少ない。終演後、しばらく音楽が流れている。この間に拍手が打たれているが、音楽が終わると手拍子になる。出演俳優が横一線に並び、舞台後方から前に進み出ると、手拍子は強まる。続く会釈の前後にHCPの循環が始まる。HCPは9巡する。俳優は順に舞台中央で会釈していくが、会釈のタイミングがHCPの循環の変わり目と重なる傾向が認められる。但し、主演級の2人に向けられる手拍子が長く持続するために、HCPの循環は生じにくい。その後、HCPは、出演者が横一線となる会釈の前後、出演者ごとの会釈の前後にも生じる。但し、この公演はアクションが少ないため、HCPの循環は、他の演劇公演のそれよりも不明確である。

9月16日にブダペストのペシュティ劇場で、『ヤノス・アラニー伝』の公演が行われた。開演は10時30分で、

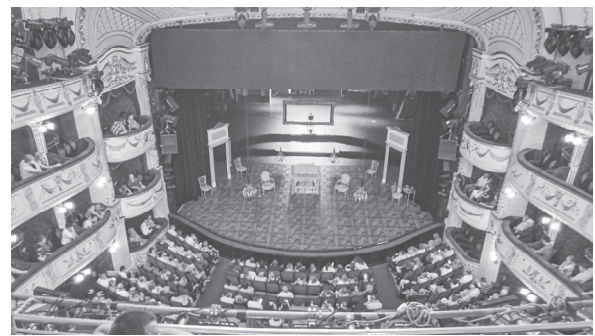


写真 12. ヴィーク劇場



写真 13. ペシュティ劇場

観客は 250～300 人である(表 1 の 19, 写真 13)。前半は、観客を巻き込んだコメディであり、笑い声も大きい。前半が終了すると手拍子になるが、音楽もしばらく流れており、手拍子は徐々に消えていく。後半は、シリアス劇になる。終演に近づくと、舞台では、足拍子に加え、手打、腿打、ブーツ打が現れ、ダイナミックなハンガリー・ダンスになる。終演後、HCP の循環が始まり、16 巡する。前半が観客を巻き込んだ派手なコメディであることが、終演後においても HCP を速やかに生じさせる結果をもたらしたといえる。出演者もすぐにカーテンコールに応じている。まず出演俳優が横一線に並ぶと、HCP が生じ、揃って会釈するとき、手拍子はゆっくりと力強くなる<sup>17)</sup>。しかし、HCP によるカーテンコールに何度も応じるうちに、舞台上の局面の移行は、HCP の循環の変わり目と対応しなくなる。なお、表 1 からわかるように、本公演では手拍子を強拍と弱拍に打ち替えるときに、少し間において 1/2 速打直しに入っている。間がおかれることにより、手拍子が観客の合意のもとに打たれていることが確かめ合われているようにみえる。

7月1日にブダペストのマダーチ劇場で、『暗い日曜日』の公演が行われた。観客は 350 人超である(表 1 の 20)。俳優も歌う劇であるが、コメディではなく、そのため歓声は少ない。HCP は 6 巡する。俳優の会釈に合わせて 1/2 速打直しが生じているように観察された<sup>18)</sup>。

#### 4.2. ミュージカル

演劇とともに HCP が安定して生じるのが、ミュージカルである。次の 2 公演は、同じ劇場の同じ舞台を比較したものである。2 公演とも、拍手と手拍子のタイミングを考慮した舞台演出がなされている。

6月26日、7月7日、7月8日にブダペストのエルケル劇場で、ミュージカル『ビリー・エリオット』の公演

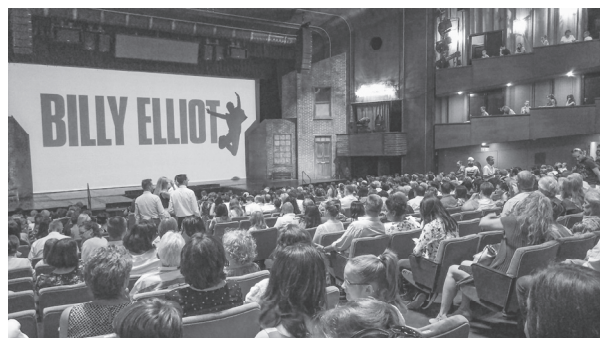


写真 14. エルケル劇場

が行われた。開演は 11 時で、聴衆は 200 人程である(表 1 の 21, 22, 23, 写真 14)。終演後、出演俳優が順に登場し会釈するとき拍手が手拍子となり、すぐに HCP が生じる。6月26日と7月8日の公演では、主役であるビリーが登場する前に 1/2 速打直しになり、ビリーが登場すると加速するが、7月7日の公演は、ビリーの登場後に 1/2 速打直しになる。いずれの公演もビリーに掛け声が掛かる。その後、音楽が始まるといったん手拍子はやむが、出演者が数人ずつ舞台に現れると、それに応じて手拍子が生じる。どの手拍子も音楽のビートに合わせて打たれるが、出演者の人気により打ち方は異なるように見受けられる。7月7日の公演には、強拍と弱拍の手拍子を音楽のビートに合わせる聴衆がいた。音楽が終わると、すぐに拍手になる。その後、出演者が横一列に並び、前に進み出て会釈してから後に下がると、手拍子から HCP が生じる。続いて指揮者が舞台上がり、再び出演者が横一列に並ぶと HCP の循環が進む。7月7日の公演では、主演俳優がオーケストラ・ピットを覗き込んで指揮者に登場を促すと、その時点で HCP の循環が始まる。その後、一旦幕が閉まるが、すぐに左右の舞台袖から俳優が順に登場する。この間、遅めの手拍子が持続する。7月7日の公演では、このときに HCP が循環している。続いて主演級俳優が揃って登場すると再び HCP が生じる。このことから、本公演では HCP はカーテンコールの役割を果たしていることがわかる。しかし、1/2 速打直しと加速のどちらがこの役割を担うのかはよくわからない。主演級であっても戯け役もいるので例外はあるが、人気俳優が列に加わると循環が加速する傾向が認められる。その後、出演者全員が横一列になり後に下がったときに HCP は 1 巡する。続いて出演者全員が舞台前方に駆けて出る場面があるが、HCP の循環は、この影響を受けずに続く。最後は出演者全員が手を振って舞台を締める。エンター

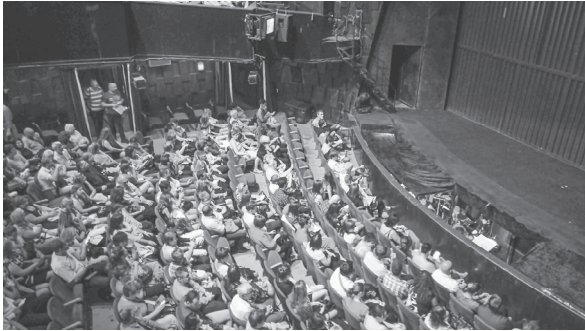


写真 15. マジャール劇場

テインメント劇では、HCP は舞台と無関係に循環することが多いが、この公演に限らず、人気俳優が舞台に出ると、循環が一時的に加速する傾向も認められる。

7月7日、7月8日にブダペストのマジャール劇場で、ミュージカル『ヴァンパイア』の公演が行われた。15時開演で、聴衆は800人超である(表1の24, 25, 写真15)。終演後、出演俳優が端役から順に登場し会釈するときには、手拍子が続いている。ドラキュラの役にはHCPが生じ、手拍子の音も強くなる。掛け声も多い。続いて指揮者が登場するが、登場前からHCPの循環は始まっている。指揮者が会釈すると、手拍子の音は強まるが、HCPはそのまま循環している。続いて横一列の出演者に指揮者が加わり列が後に下がると、再びHCPの循環が始まる。出演者の列が前に進み出るが、HCPの循環はそのまま持続する。7月7日には舞台前方に進み出るタイミングで、明確な1/2速打直しが生じる。続いて出演者の列が後に下がると一旦幕が閉まりすぐに音楽が始まる。ここで音楽に合わせて手拍子が打たれる。音楽が始まりHCPが通常の手拍子になることから、等間隔ビートがHCPの循環を妨げていることがわかる。

その後、出演者が一人ずつ幕外に登場し会釈するが、手拍子はそのまま続く。歓声も大きい。音楽が終わると幕が開く。ここで横一列の出演者が前に進み出るとHCPが生じる。7月7日の公演では、このときに強弱形成への遅れが生じている。列が下がると幕は再び閉まる。しかし、幕はすぐに開き、再び音楽が始まり、手拍子になる。その後、出演俳優が再び順に登場し会釈するときにも、手拍子は続いているが、HCPは生じない。音楽が鳴り止むと、拍手から再び手拍子になりそのまま舞台が締まる。この公演では、出演者が横一列になるときは、手拍子は強まり循環も速くなっている。

#### 4.3. ダンス

身体を躍動させるダンスの公演でHCPはどのように生じるのであろうか。その検討の前に、まず、強拍と弱拍、テンポアップ、1/2速への打ち替えを要素として持つHCPと、音楽のリズムとの関係を検討しておく。HCPにみられる、テンポの加速と急激な減速、拍の分割差異化、強弱アクセントの交互呈示、呼吸に合わせたフレーズの生成、これらは音楽にも一般的にみられる現象であり、音楽とHCPとの類似性を指摘できる。とりわけハンガリー・ロマ(ジプシー)の音楽は、旋律に遅い部分と速い部分を作る演奏を特徴とするため、HCPとの親和性は高いといえる。例えば、チャールダッシュでは遅い部分と速い部分の弾き分けに加え、加速したテンポで終わる演奏が標準的とされる。HCPにみるテンポの切り替えは、テンポの揺らぎや加速をこうして許容する音楽と無関係とは思えない。また、ハンガリーの舞踊では、手打に加えて、指鳴らし、腿打、ブーツ打など、身体を打楽器のように叩きながら踊る<sup>19)</sup>。これらの技法に伴うテンポの揺らぎは、HCPほどにはその変化が急激ではないが、等間隔ビートにテンポとダイナミクスの変化を絶えず与えているという意味で、HCPの特徴と通底している。

では、ハンガリー・ダンスの公演では、聴衆はどのように手を打つのであろうか。9月11日にブダペストのオードリ・ステージで、ダンス・ミュージカル『舞踊と詩の思考』の公演が行われた(表1の26, 写真16)。聴衆は200人程である。出演者は10人で、ハンガリーの民族的な音楽とダンスが中心のミュージカルである。ダンサーは、手打、足拍子に加え、指鳴らし、腿打、脛打、ブーツ打など身体を打楽器のように叩きながら踊る。身体のどこが打たれているかは音色から識別できないが、手を打つときにやや強い音が生じている。この他、ダンスに活を入れるために靴で床を強く打つ行為、手打、指鳴らし、ヴァイオリンによる掛け合いも現われる。終演後、



写真 16. オードリ・ステージ



写真 17. RaM コロッセウム

拍手に続いてすぐに手拍子になり、明確な HCP の循環が生じる。HCP は 11 巡するが、カーテンコールや舞台の局面との対応はみられない。3 回目の HCP 形成時には、表 1 に A で示した遠方の多数による拍手団の HCP も聴かれる。ダンサーのみならず演奏家に強い拍手が送られる。

9 月 13 日にブダペストの RaM コロッセウムで、モダン・ハンガリーダンス『偉大なるジプシー』の公演が行われた。聴衆は 400～450 人である(表 1 の 27, 写真 17)。手打、足拍子が中心であるが、指鳴らし、腿打、脛打、ブーツ打、胴打など身体を打楽器のように叩きながら踊る。床を手で叩いた後、膝を叩き、手打をするなどの動作がある。複数の身体部位を音楽に合わせて打つことにより、手打と足拍子だけの単調な身体動作を回避し、華麗さと素早さを両立させたダンスを作っている。終演後すぐに手拍子が始まる。続いて出演したダンサーが順に聴衆に挨拶した後、横一列に並び会釈し、前に進み出て一旦下がりまた前に出ると、まず 1/2 速打直しが生じ、そのまま加速する。ここで、主役ダンサーは、この加速した聴衆の手拍子のテンポに合わせて、自らの右手首をくるとゆっくり回転させる。そして聴衆とともに手拍子を打つ真似をしたあと、それを速めて拍手に戻し、仕草をやめる。この仕草に呼応して、聴衆の HCP も、ばらけた拍手になり中断する。聴衆の手拍子に合わせ、それを誘導して中断させた主演ダンサーのこのアクションは、HCP を歓迎する振る舞いではない。むしろ、HCP のテンポの加速が舞台上のテンポと親和的でないことを、暗に伝えようとする振る舞いである。

その後、改めて主演ダンサーが、手打、足拍子、腿打ちを始めると、他の出演者も登場しダンスを再開する。続いて主演ダンサーは、右側の聴衆と左側の聴衆それぞれに、タイミングに合わせた掛け声を求める。続いてこの掛け声を引き込んだダンスを新たに始める。こうした

聴衆とのやりとりが続きダンスが終わるが、手拍子の後には再び HCP がゆっくり始まる。しかし、主演ダンサーは、舞台が HCP で締められるのをあくまでよしとしない。自ら右手首をくると回転させる仕草で観客の HCP を真似たあと、2 回目の 1/2 速打直し後に、BPM79 から BPM207 まで急加速させて拍手に戻し、手拍子を制止させる。そして聴衆に掛け声を掛けさせて、舞台を締める。ハンガリーのダンサーは、HCP よりも掛け声で称賛されることを望んでいることがここからわかる。HCP に伴うテンポの加速は、ハンガリー・ダンスのリズムを引き立てるものではないと彼らは認識しているようである。

他方、古典的バレエでは、HCP はハンガリー・ダンスほどは生じない。9 月 12 日にブダペストの芸術宮殿フェスティバルホールで、モダンバレエの公演が行われた。聴衆は 150 人程である(表 1 の 28)。1 曲目の《3 つのグノシエンヌ》はサティの音楽に振付けた古典的なバレエである。終演後、出演した踊り手が順に舞台に登場するが、すぐには聴衆に会釈しないので手拍子が揃わない。踊り手全員による会釈の後、手拍子を揃えるタイミングをしばらく探る時間があり、HCP が 1 回生じる。2 曲目の《トロイのゲーム》はモダンダンスであるが、拍手が続く中に HCP が生じるとすぐに幕が閉められる。HCP が生じるのを待って幕を閉めているようにも、手拍子を終わるタイミングを計るために HCP が打たれているようにも見受けられる。

3 曲目の《5 つのタンゴ》は、ピアソラの音楽に振付けたバレエで、踊り手一人一人が個性的な身体表現を試みている。主役 2 人が会釈するときの手拍子は速く力強いが、HCP は生じない。出演した踊り手が横並びで一斉に聴衆に会釈すると HCP が始まり、そのまま 2 巡する。この公演では、強弱形成への遅れは生じていないが、どの曲にも、手拍子を揃えるタイミングを探る時間があり、HCP はややばらけている。

#### 4.4. 舞台公演にみる HCP の特徴

舞台公演にみる HCP の特徴を述べる。

- ・演劇やミュージカルの公演では、クラシック音楽の演奏会よりも HCP が頻繁に生じる。
- ・演劇やミュージカルの公演の多くでは、手拍子団は確認できない。手拍子団が存在しても、会場全体の強力な手拍子に消されて聞こえない例が多い。

- ・舞台と無関係に HCP が循環する例が多いが、人気俳優の登場や会釈で、循環が一時的に加速する例もある（6月26日、7月7日、7月8日）。
- ・ミュージカルでは、HCP の生起とタイミングを予期した演出がなされる。
- ・ハンガリー・ダンスに HCP は生じやすいが<sup>20)</sup>、ダンサーは、HCP に伴うテンポの揺らぎが、ダンスのリズムを引き立てないと認識することがある（9月13日）。
- ・等間隔ビートの音楽が流れるとき、聴衆は HCP でなく、通常の手拍子で合わせる（7月7日）。

## 5. 手拍子に加速が生じにくい公演

### 5.1. ポピュラー音楽の演奏会

ポピュラー音楽において聴かれる等間隔ビートは、HCP とどこまで親和的であろうか。演劇の劇伴にも等間隔ビートの音楽が多いが、セリフ中心であれば妨げにならない。ミュージカルにも等間隔ビートの音楽は多いが、聴衆は旋律を聴いているので妨げない。それでは、大音量で等間隔のビートリズムを否定なく聴かせるような音楽の演奏会に、HCP は生じるのであろうか。

6月29日ブダペストのサーカスの公演は、観客が1500人程で子供が多い。公演中ずっとライブのジャズとロックが大音量で流れ続け、その中でサーカス芸が行われる。歓声は大きい。司会者が観客に通常の拍手もしくは手拍子を要求したため、HCP が生じる余地はない。

7月4日にブダペストのヴァイダフニャド城で、女性ヴォーカル歌手2人と11人のダンサーによる屋外演奏会が催された。歌手の一人は多発性硬化症を患い着座のまま歌う。ハンガリー語の歌詞の内容を筆者は理解できないが、音楽は大音量のディスコ・ミュージックである。聴衆は500人程で、客席の左右には立見客もいる。ダンサーと聴衆は、曲中に後打の手拍子を打つ。手拍子が続く中に加速の徴候が2回生じるが、大音量のビートにより手拍子の音が聴きづらくされたため、HCP には至らない。終演後は、コール・アンド・レスポンスが生じ、客席から舞台上上がりダンサーとともに踊りだす聴衆、身振り動作などを他の聴衆に指示している聴衆が現れる。客席で椅子が壊れるなどトラブルも頻発する。

ポピュラー音楽の演奏会では、演奏会場の広さも HCP を妨げる要因になる。7月1日にブダペストのマルギット島の屋外ステージで、サボ・バラージュによるハンガリー・フォークロックの演奏会が開かれた。ハンガリー

音楽の特徴を活かしたポップ音楽で、聴衆は2500人超である。会場が広大であるため、遠方の拍手音は殆ど聞こえず、このため HCP は生じない。客席後方の中央で手拍子が生じかけるが、前方の聴衆を巻き込めない。前方中央の聴衆には後方で生じる手拍子は聞こえておらず、そもそも興奮して声を発する聴衆は、手拍子を打とうとしない。その後、演奏者が手拍子を促し、会場全体を手拍子に誘導するが、加速せずに終わる。

ジャズの演奏ではどうであろうか。まず、ジャズ・クラブでの演奏では HCP は生じにくい。6月27日にブダペストのオーパス・ジャズ・クラブで、ドレッシュ・ミハイ五重奏団によるハンガリアン・ジャズの演奏会が開かれた。聴衆は95～100人である。会場がコンサートホールではなく、集中して演奏を聴く状況ではないため、手拍子も揃わず、会場全体の HCP は生じない。但し、アンコール1曲目後の拍手の後に、1/2速打直しの徴候がみられる。筆者の左隣の客は一人静かに HCP を試みるが、他の聴衆を巻き込む意図はないようであった。聴き手一人の賛辞として HCP が試みられていた。

では、コンサートホールのジャズの演奏ではどうであろう。7月3日にブダペストの芸術宮殿バルトークホールで、チックコリア・アコースティック・バンドの演奏会が開かれた。聴衆は1500人程である（表1の29、写真18）。休憩前の拍手は手拍子になりかけるが、演奏者が制止して休憩に入る。終演後は、演奏者が舞台袖に下がるときに HCP が生じる。カーテンコールに応じて舞台袖から舞台に出ると2回目の HCP が生じそのまま循環する。3回目の HCP における1/2速打直しのテンポに乗って、演奏者はアンコール演奏を始める。アンコール演奏の途中で、演奏者は声と身振りで聴衆にレスポンスのアクションを要求する。表1からは読み取れないが、アンコール終了後の手拍子は、ベースの刻みに合わせて倍速テンポで打たれる。演奏者は片耳に手を当てこの倍速テ



写真18. 芸術宮殿バルトークホール

ンポの手拍子を聴いていたが、この手拍子にリズムがあると認識したらしく、再びピアノに向かい聴衆の手拍子に合わせて演奏を始め、コール・アンド・レスポンスを聴衆と取り交わしてから舞台を締める<sup>21)</sup>。その後、聴衆は総立ちとなるがHCPは生じない<sup>22)</sup>。

なお、この演奏会で観察されたHCPは、ジャズの演奏会においてHCPが一般的に生じることの根拠にはならない。本公演は、今年78歳になるチック・コリア最後のブダペストの公演である。HCPは、演奏に対する純粋な称賛もあるだろうが、遥々当地を訪れた演奏者に対する歓待としても打たれていたと考えられる。

ポピュラー音楽でも等間隔ビートが明確でないジャンル、民族色が強いジャンルでは、明確なHCPが生じる。4月16日にデブレツェンのケルチエイセンター大ホールで、7人のポップフォーク歌手によるタマーシュ・チェ・追悼コンサートが開かれた。聴衆は500～550人程である(表1の30)。全20曲中の4曲にHCPが生じる。まず、男性歌手が1曲歌い終えて口笛を吹いたときにHCPが生じる。次に、聴衆とともに着席しているプロデューサーが舞台上の歌手に促されて立ち上り聴衆に会釈するときHCPが生じる。これらは演奏が進んでいく中での予期しない出来事に対するHCPである<sup>23)</sup>。その後、プログラムの曲目がすべて歌い終わるとHCPが生じる。このHCPは明確であり演唱後すぐに生じている。このとき最前列の男性が頭上に手をあげて手拍子に誘導しようとするが、誘導できずに終わる。続くアンコール後のHCPには循環が4回生じる。

もちろん閑散としすぎてもHCPは生じない。6月30日ブダペストの芸術宮殿前の広場での6時間に及ぶポピュラー音楽の屋外演奏会では、ハンガリーのみならず近隣諸国のバンドが出演した。聴衆は平均して80人程である。会場は出入りが自由であるが、椅子席が用意されておらず、聴衆は座りやすいところに腰掛けて聴く。聴衆全員が一体となって演奏に耳を傾ける状況が作られず、HCPは生じない。但し、周囲の聴衆の拍手と無関係に手拍子を加速している聴衆が、1曲の演奏につき1～2人存在する。

## 5.2. 純粋な称賛が憚られるとき

クラシック音楽の演奏会であっても純粋な称賛が憚られる場合がある。9月15日にブダペストのリスト博物館ホールで開かれたピアノの発表会では、手拍子は生じる



写真 19. リスト音楽院大ホール

がHCPには至らない。ベートーヴェンを巧く弾いた女性への手拍子は刻々と力強くなっていったが、加速は生じない。

しかし、音楽コンクールではHCPが生じる事例がある。9月16日にブダペストのリスト音楽院大ホールで、エヴァ・マルトン歌唱コンクール本選演奏会が催された。伴奏オーケストラはハンガリー国立歌劇場管弦楽団で、聴衆は1000人程である(表1の31、写真19)。歌手が1曲歌い終わると拍手と歓声が生じ、歌手は会釈してそのまま舞台袖に下がる。このときにカーテンコールの手拍子が生じるが、コンクールの本選であるため司会者はそれを制止する。優勝者であるメキシコ男性歌手の歌唱のみに、カーテンコールの手拍子に続いてHCPが生じた。その後、審査結果の発表があり、入賞者が舞台上に登場し拍手で称賛されるがHCPは生じない。HCPが生じるのは、入賞を逃した歌手が舞台に勢ぞろいしたときである。このとき手拍子はすぐにHCPに転換する。入賞者への称賛よりも、入賞を逃した歌手へのねぎらいとしてHCPは打たれている。その後、このねぎらいのHCPがオーケストラと指揮者に向けて打たれる。

エンターテインメント性を持たない教会のオルガンコンサートではHCPは生じるであろうか。6月28日のブダペストの市内教区教会でのオルガンコンサートでは、プログラム最後の曲に2～3人の拍手が入っただけで終わる。聴衆は25人程である。7月2日ブダペストの聖イシュトヴァン大聖堂でのオルガンとソプラノのコンサート、7月7日マーチャーシュ教会での声楽とオルガン付き室内楽コンサートでは、拍手のみで、手拍子すら生じない。ともに聴衆は80人程で、外国人観光客の姿も見える。

では、同じくエンターテインメント性を持たない実験的な音楽の演奏会では、HCPは生じるであろうか。9月15日にブダペストのパラティン・ホールで開かれた現代

音楽の演奏会は、舞台上に指揮者 1 人と弦楽器奏者 15 人がおり、客席には聴衆に加えて作曲者がミキサートとパソコンを前にして着席している。聴衆は 15 人程であるが、聴衆の中に作曲者がいるため、純粋な聴衆は 10 人程である。1 曲の演奏が終わるごとに、まず、指揮者が聴衆の中の作曲者に向けて速めの拍手を送る。続いて聴衆による拍手が生じるが、手拍子にならず、HCP はその徴候すら現れない。拍手も弱めである。実験的音楽では HCP は生じにくいようである。

### 5.3. 子供の聴衆

HCP は、ハンガリーの子供が成長して大人になるまでのどこかの段階で学習されていると考えられるが、子供はいくつごろから HCP の打ち方を身につけるのであろうか。この問題を探るため、子供のための演奏会と劇を調査した。

6 月 27 日ブダペストの外れクーバーナ・キシュペシュトで催された子供のための人形劇では、観客は小学校低学年以下とその父母が 150 人程である。公演終了後に中年女性がホールの左横に立ち、身振りで子供に手拍子を促す。拍手は手拍子になるが HCP は生じない。7 月 1 日ブダペストのヴァロスマイヨール公園の屋内ステージで催された子供のための劇は、観客は小学校低学年以下とその父母である。拍手は手拍子になるが HCP は生じない。終演後の手拍子が止むまで、等間隔ビートの音楽が続いたため、加速が生じる余地はない。9 月 11 日ブダペストのカラーカ・キチクネクでの幼児のための演奏会では、聴衆は幼児 5 人と父母 5 人である。ベース奏者が自ら手拍子を取り聴衆にも手拍子を促すが、聴衆の手拍子に加速は生じない。4 月 27 日トゥルグ・ムレシュの文化宮殿での、同地の交響楽団と解説者による子どものためのレクチャコンサートでは、聴衆は小学校低学年以下が 200 人程と父母が 30 人程であり、演奏曲目は、ヴィヴァルディの《トランペット協奏曲》及び《2 台のチェロのための協奏曲》である。会場の後方で大人の男性が、手拍子→1/2 速打直し→加速を身振りと言で示し、HCP に誘導しようと試みるが、子供はばらけた拍手のみを打つ。子供にはこの HCP が聞こえたはずだが、手拍子が生じる直前に拍手は終わってしまう。以上の調査結果から、小学校低学年以下の子供は HCP を打たないことがわかる<sup>24)</sup>。

それでは、中高校生はどうであろうか。4 月 27 日トゥルグ・ムレシュの高校が主催するダンスパーティでは、

ディスコ風の音楽が終始演奏されていたが、演奏終了後に、2~3 人の高校生が、手拍子→1/2 速打直し→加速を身振りとともに表現していた。

最後に子供が多いミュージカルの事例をあげておく。9 月 15 日にブダペストの RaM コロッセウムで、子供向けミュージカル『シンデレラ』の公演が行われた(表 1 の 32)。小学校低学年以下の子供とその父母が 400~450 人程で、半数以上が子供である。終演後に典型的な HCP が 1 回のみ生じるが、それは大人の観客が先導している。筆者の前右側の中年夫人は一人で HCP を打つ。子供達はそれを黙って見ているが、どう拍手すればよいのかわからず、躊躇して叩きかね、拍手をやめてしまうか、それぞれの拍手を続けている。但し、小学校低学年に見える女の子が一人だけ周囲の大人に合わせて HCP を試みていた。このことから学習した子供は HCP を打つことがわかる。続いて音楽が再開し、出演俳優が順に登場し会釈すると、手拍子も滞りがちになる。最後に出演者全員が横一列になると、手拍子は揃うが、HCP は生じない。

### 5.4. HCP を生じにくくする条件

HCP を生じにくくする条件について整理しておく。

- ・屋外でしかも演奏会場が広すぎると、遠方の手拍子が聞こえず生じにくい。
- ・等間隔ビートが大音量で会場に鳴り響いていると、手拍子が聴きとりにくく生じにくい。
- ・集中して音楽を聴く状況でない演奏会では生じにくい。
- ・ポピュラー音楽でもハンガリーの民族色が強い演奏会は生じる。
- ・楽器の発表会やコンクールなど純粋な称賛が憚られる演奏会では生じにくい。
- ・教会のオルガンや実験的音楽の演奏会のように、規格化されたエンターテインメント性をもたない演奏会では生じにくい。
- ・小学校低学年の子供は HCP を打たない。

### 6. おわりに

本稿は、ハンガリー及びルーマニアにみられる加速する手拍子 HCP について、コンサートホールや劇場での調査をもとに検討した。HCP は、ハンガリー及びルーマニアの一部の地域のみの手打ち方であり、ハンガリーの人々が、演奏会や演劇公演において、自らのアイデンティティを保とうとするための、様式化された称賛行為で



ある。しかし、HCP は、これを打っているハンガリー人にすら正しく認識されておらず、ハンガリー語及び英語を用いた関連論文はないといつてよい。HCP はハンガリー人のアイデンティティーを強める打ち方ではあっても、彼らによって自覚的に対象化されにくい現象であるといえる。筆者は、古今及び東西の拍手に関する文献を調べているが、HCP の成り立ちについてはまだ文献資料が見つかっていない。以下、本稿の検討を整理してみる。

まず、HCP はどんな公演でも打たれる手打ではない。クラシック音楽の演奏会に加え、演劇、ミュージカル、ダンスなどエンターテインメント性が強い公演では HCP は生じやすいが、教会や実験的音楽の演奏会、発表会やコンクール、子供向けのコンサートでは生じにくい。大音量による等間隔ビートの音楽も HCP を妨げる。HCP の検討は、エンターテインメントというものの認識に再考を促すとともに、その規格化や享受のあり方について考えさせるものである。

では、HCP は何のために打たれているのであろうか。儀礼的に打たれる HCP もあるが、純粋な称賛の HCP が殆どである。演奏家へのねぎらいを込めて打たれる HCP も多い。重要であるのは、HCP が通常の拍手よりも強いメッセージ性と表現力を持ち、聴衆と舞台のみならず聴衆と聴衆の多様なコミュニケーションを作り出している点である。悠然と循環しているように聞こえる HCP の打ち方の変わり目は、カーテンコールや会釈のタイミングと無関係であるときもあるが、何らかの対応がある事例が多い。人気俳優が会釈したり、花束を受け取るタイミングが、HCP の循環を速めたり、その変わり目と重なる事例もみられる。他方、HCP は、手拍子団をさまざまなかたちで介在させている。HCP が聴衆全体の間合いで作られる事例があるが、手拍子団がそれを誘導する事例もある。手拍子団が存在しても、他の手拍子団とタイミングが合わない事例や、大人数の手拍子に消されてしまう事例がある。分裂したままの HCP や、掛け合いの様相を呈する HCP もある。聴衆は、こうした手拍子団の存在と位置、相互関係を聴きとりながら、打ち方を判断していると考えられる。

HCP の循環の中で、打ち方の判断が難しい段階は、1/2 速打直しであろう。本稿では、手打の間隔を広げるときに、タイミングの判断に逡巡が生じる事例を検討した。1/2 速打直しは、聴衆が、なりふりかまわず手を打つのではなく、次の瞬間にどう打つかを、他の聴衆の意図を

推測したうえで判断する余地を残した打ち方である。今現在の手拍子を維持するのか、どの時点で手拍子団の誘導に応じるのか、聴衆は、次の段階に整然と移行できるように、絶えずタイミングを計ることが求められる。1/2 速打直しは、手を打っている自己と他の聴衆とを第三者の目で認識している段階であるといえることができる。

HCP にみるこれらの特徴と振る舞いは、加速のない通常の拍手や手拍子のあり方にも再考を促すことになる。すなわち、今日の演奏会や演劇公演において、一様の音響現象に聞こえる拍手や手拍子は、それを特定の方向に導こうとする人々のあいだの、どのようなせめぎ合いの中で生起し推移しているのか。HCP を検討することは、称賛する拍手や手拍子の消長の中に介在する暗黙のコミュニケーションに目を向けさせる<sup>25)</sup>。

筆者は、加速する手拍子が、現在よりも打たれていた時代が、過去にあったかもしれないと考えている。本稿では取り上げていないが、ハンガリーやルーマニア以外の手拍子にも、加速への徴候がみられる事例がある。それらに加速が生じなかったのは、殆どの場合、多数派の手拍子によって聞こえにくくされるなど、拍手者一人一人の意図が聴き取られる環境が用意されていなかったからであると推測される。しかし、条件が多少変われば、それらの手拍子に加速が生じていたかもしれない。文献にみられる過去の手打の記述のうちいくばくかが、加速する手拍子であったとしても不思議はない。

本稿では、録音と調査記録にもとづいて執筆したが、録音データは音声共有サイトなどでの公開も検討している。今後は、動画を収録したうえ HCP の循環と舞台上の局面との対応づけを再検討すること、ハンガリーの放送局に保存されている初期のライブ録音の検討を行うことが課題である。

## 謝辞

トゥルグ・ムレシュ交響楽団の常任指揮者を務め、九州大学芸術工学部フィルハーモニー管弦楽団と縁が深い尾崎晋也氏には、ルーマニアの調査に先立つ情報を提供いただいた。ハンガリー音楽の事情に詳しい東京大学の岡本佳子氏には、ハンガリーの調査に先立ち助言をいただいた。

## 注

- 1) 観客の称賛として、拍手より手拍子が多く打たれる地域やジャンルはある。例えば、ロシアのボリショイ劇場やマリインスキー劇場のオペラやバレエの公演では、終演後は、拍手から手拍子になりそのまま終わることが多い。
- 2) ゾルタン・ネダは、拍手と手拍子の消長を同期現象として認識し独自の確率振動子モデルから説明しようとする。Z.Neda, et al. "Physics of rhythmic applause" Phys. Rev. E., The American Physical Society, Vol. 61 (6), pp. 6987-6992, 2000. しかし、拍手と手拍子は殆んどが意図的に打ち分けられているものであり、それらを同期現象として説明することは妥当ではない。田中憲人・矢向正人(2016)「クラシック音楽の演奏会における拍手と手拍子の交互的振る舞いに関するモデルの構築」『日本音響学会秋期研究発表会講演論文集』1-8-6.
- 3) 例えば、久留米市の山田俊之は、ボディパーカッションの実践の中で、手拍子から拍手を導く指導をしている。手と手が交差しているときに1回手拍子を打つ。交差する間隔を短くして、テンポを速めていくと、会場全員の手拍子のテンポが速くなり、最後は拍手する状態になる。最後に1回だけパチンと音を出して終わる。こうして拍手と手拍子を連続的に認識させるとともに、拍手の細かい刻みもしっかり意識できるように指導する。山田俊之(2010)『ボディパーカッション入門』音楽之友社, 49.
- 4) 例えば、歌舞伎の柁やツケ打、大相撲の拍子木などでも聴くことができる。
- 5) 大道芸におけるこの加速現象を調べるために、筆者は2018年8月にエディンバラのフリンジ・フェスティバルにおける路上の大道芸を調査した。フィールド競技や大道芸にみられる手拍子の加速現象については稿を改めたいと考えている。
- 6) 手拍子の加速と間違えやすい現象に、手拍子そのまま終わらず、手拍子がばらけた結果として、拍手になる現象がある。野外を使ったフェスティバルでは、観客に遠方の手拍子が聞こえず、手拍子の中に崩れとしての拍手が聞こえてくる。ロック・フェスティバルなどでよく聴かれるが、ベルリンのヴァルトビューネ・コンサートでも毎年のように生じる。本稿はこの現象を対象としていない。
- 7) <https://www.youtube.com/watch?v=JISfEmgRo0> (2018年12月31日取得)。筆者が初めて聴いたハンガリーにおけるHCPであり、岡本佳子氏に教えていただいた。
- 8) 以下に述べるどの例でも、手拍子2(強拍+弱拍)と手拍子3(強拍のみ1/2速)は、別々の段階に聞こえている。但し、筆者が、この変わり目における聴衆の手の打ち方を、周囲を見渡して観察したところ、強拍と弱拍を一人で打っている観客も、多少は存在するように見受けられた。
- 9) <https://www.youtube.com/watch?v=YwUjIBh5mY0> (2018年12月31日取得)。
- 10) <https://www.youtube.com/watch?v=0pYrCTuA2N0> (2018年12月31日取得)。
- 11) <https://www.youtube.com/watch?v=Wrwqm0c-0Vo> (2018年12月31日取得)。
- 12) トリアノン条約はマジャール人が多く住む町や村への地理的配慮などは皆無で、多くのマジャール人が新しく定められた国境の外側に取り残されてしまった。特に現在のトランシルヴァニア地方に残されたマジャール人は145万人程と言われている。六鹿茂夫編(2007)『ルーマニアを知るための60章』明石書店, 303.
- 13) 表1を説明しておく。手拍子形成時点は、演奏後の拍手が手拍子に移行する時点である。初期区間平均テンポは、手拍子形成時点から強弱差形成時点までの平均テンポである。強弱形成時点は、強拍と弱拍が生じる時点である。強弱形成遅れは、初期区間終了時点と強弱形成時点との間隔である。1/2速形成時点は、弱拍が打たれず1/2速となる時点である。加速区間は、1/2速形成時点から(Eがあれば手拍子形成時点から)初期手拍子に回帰するまでの加速区間である。始点と終点におけるBPMを括弧で示した。1/2速加速区間散(ばら)けの有無である。1/2速形成時点及び加速区間における散(ばら)けの有無である。規則性消滅時点は、手拍子の規則性が崩れる時点である。番号列のAは共存する別のHCPであることを示す。
- 14) 本稿では、手拍子を生じさせる集団を手拍子団と呼ぶ。
- 15) 表1をもとにデータを整理しておく。手拍子1のテンポ(初期区間平均テンポ)の全データ平均はBPM162、手拍子3のテンポ(1/2速形成時点テンポ)の全データ平均はBPM92、手拍子4の終了テンポ(加速区間終了時テンポ)の全データ平均はBPM149、手拍子4の平均加速時間は11.3秒である。また、手拍子3における直前のテンポからの変化率(1/2速形成時点テンポ/初期区間平均テンポ、及び1/2速形成時点テンポ/直前の加速区間終了時テンポ)の全データ平均は0.59であり、実際には1/2速よりも速く打たれている。
- 16) 以下の本文中のN曲目は、演奏された曲順ではなく、HCPが生じた演奏の曲順を示す。
- 17) なお、横一線の会釈は、少し間をおいて2回会釈する。間をおいた2回の会釈により、HCPと呼応した無理のない会釈になる。
- 18) HCPが生じない演劇の例も挙げておこう。4月27日夜にトゥルグ・ムレシュの国立劇場の3階小劇場で上演されたイヨネスコ劇では、終演後にHCPは生じず手拍子のみ続いた。HCPが生じない理由は、上演された劇がハンガリーの演劇でなくルーマニアの演劇であるからと考えられる。
- 19) もちろん、これらの技法はハンガリー舞踊だけの特徴ではない。フラメンコの舞踊でもみられるし、跳ね上げた足を打つ典型的な動作はむしろ南アフリカの舞踊でみられる。
- 20) ハンガリー・ダンスであっても、聴衆にハンガリー人が少ない場合は生じない。6月28日ブダペストのドゥナ・パロタ劇場でのハンガリー音楽と舞踊のショーでは、聴衆はハンガリー人10人程と外国人30人程であり、終演後には歓声が多く掛かる。劇場後方のハンガリー人が、強い手拍子を打つと、前方の外国人もこの手拍子に応え、会場全体が手拍子となるが、加速は生じない。
- 21) 耳に手を当てて聴いていたのは、聴衆の一人一人が倍速で打っているのか、表打と裏打の手拍子が重なり倍速テンポのように聞こえるのかを見極めるためである。
- 22) HCPとスタンディング・オーバーションの違いを述べておく。まず、HCPは打ち始めた後にいつでもやめられるが、スタンディング・オーバーションは1回立ち上がった後、そのままずっと手を叩き続ける。通常は座ることもないし、打ち方を変化させることも少ない。また、スタンディング・オーバーションは、一人だけ立ち上がってもよく目立つが、HCPは、大人数による同時の手拍子であることが、循環の前提となる。
- 23) プログラムの前半では、歌手は演唱し終えたとすぐに舞台袖に下がる傾向がみられた。
- 24) HCPに子供が関わらないのではない。4月15日デブレツェンのケルチェイセンターの一階で午後に行われたアマチュアのフォーク・バンドの演奏会では、子供が舞台上に登場したとき、手拍子が少し加速する。子供の演奏を、大人が手拍子の加速で称賛することはある。
- 25) 2)を参照。



